

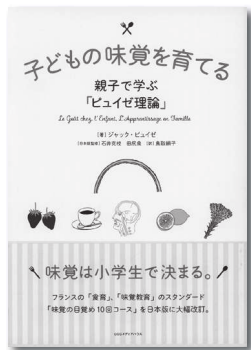
L'EDUCATION DU GOUT

味覚教育の主著がさらにわかりやすく

『子どもの味覚を育てる ～親子で学ぶ「ピュイゼ理論」～』

ジャック・ピュイゼ 著
石井克枝、田尻泉 日本語版監修
鳥取絹子 訳

CCC メディアハウス
(2017.10.5)
四六判 312 ページ
定価 (本体 1,600 円+税)



本書は1970年代にジャック・ピュイゼ氏によって表された「味覚教育」の主著。2004年に同訳者により『子どもの味覚を育てる—ピュイゼ・メソッドのすべて』（紀伊國屋書店）として邦訳はされていたが、「日本では日本の食文化に合わせて展開してほしい」というピュイゼ氏本人からの意志を受け、今回の改訂新訳となった。監修者には調理学や食教育が専門の石井克枝氏と「子どものための味覚教育研究会（IDGE）」代表兼チーフコーディネーターの田尻泉氏が就き、この10余年の日本での味覚教育の実践と経験が反映されてさらに読みやすく、また使いやすくなっている。味覚教育とは何か。ピュイゼ氏はこう述べる。「子どもに味わうことを教えるとは、食べものや飲みものから幸せな経験を得ることを、時間をかけて教えることです。幸せな経験をする、子どものなかにその経験を人と分かち合いたいという気持ちが芽生えます。そして経験から学んだものは『味覚の根幹』になります。『味わうこと』を学ぶと、季節や自分を取りまく状況、その場所の空気などに応じて、子どもは自分自身で自分のための選択をすることができるようになります」。そして味覚教育にはこれからの日本の教育に必要な要素、「思考力、表現力」「主体的に取り組む力」がたっぷり詰まっている。監訳者の石井先生はこう解説される。「味覚教育では、五感を使って自分で感じたことを表現することによって、自分が感じたことを認識していきます。自分が感じたものは自分自身だけのもの、すべて正解です。この繰り返しによって、子どもたちは自分自身で感じたことを表現できるようになり、思考していく喜びと自信を得、それが判断する力となり、主体的に取り組むようになっていきます。味覚教育はまた、自分と他人の感じ方の違いを知ること

から、お互いを認め合い尊重する社会性も育みます。こうして食べるだけでなく自分の身の回りの環境、自然、社会、芸術へと様々なところに興味関心が広がっていきます。フランスの指導者養成では小学校教諭も多く研修を受けています。それは小学校の段階で教科学習の土台になる味覚教育を継続的に取り入れることにより、最も効果が得られるという理由からでした」。

本書により、味覚教育がフランス直伝での狭い範囲の家元芸としてではなく、日本に土着し、各地の状況に合わせ、教育現場で多様に展開されて、ぜひいろいろな花を咲かせていってほしい。ちなみに仏語の「ピュイゼ」には「泉などから水を汲み取る」という意味もある。

読者プレゼント
(2名)

ご紹介した書籍をプレゼント致します。本誌へのコメントをお書きのうえ、ハガキまたはFAX、メールでお申し込みください(2018年2月末日必着)。